



Data

監督：スティーヴ・マックイーン
 出演：キウエテル・イジョフォー／
 マイケル・ファスベンダー／
 ベネディクト・カンバーバツ
 チ／ポール・ダノ／ポール・
 ジアマッティ／ルビタ・ニョ
 ンゴ／サラ・ポールソン／ブ
 ラッド・ピット／アルフレ・
 ウッダード

👁️👁️ みどころ

今年もアカデミー賞の季節がやってきた。その大本命は、スティーヴ・マックイーン監督による「史実にもとづく物語」。『アミスタッド』（97年）もすごかったが、本作もすごい。

なぜ、「自由黒人」が一夜にして財産も名前も奪われ、奴隷として売り飛ばされたの？その苦悩の日々とは？そして、12年間いかにして生き抜き、いかにして救出されたの？

まさに、「魂を揺さぶられる人間ドラマ」を、本作でじっくりと！



■□『アミスタッド』も『本作』も史実にもとづく物語！■□

アメリカの黒人奴隷をテーマにした名作は多いが、私が最も大きな衝撃を受けた映画はスティーブン・スピルバーグ監督の『アミスタッド』（97年）（『シネマルーム1』43頁参照）。「アミスタッド号の反乱」は1839年に起きた歴史上の事実だが、その後、一網打尽に捕らえられた反乱奴隷たちの裁判の行方は・・・？

他方、ダニエル・デイ＝ルイスがリンカーン大統領を演じて、第85回アカデミー賞主演男優賞を受賞したスティーブン・スピルバーグ監督の『リンカーン』（12年）では、奴隷の解放を宣言する法律を制定するため、「議会対策」に苦勞を重ねるリンカーン大統領の姿が描かれていた（『シネマルーム30』20頁参照）。つまり、「奴隷解放宣言」は宣言と言われているが、実際はアメリカ合衆国議会が提案し、リンカーン大統領が承認した「法律」で、2部に分かれて発布されたもの。そして、その1部が発布されたのは1862年9月22日、第2部が発布されたのが1863年1月1日だ。ところが、本作を観て私ははじめて1841年という奴隷制度の真っただ中でも「自由黒人」なるものが存在してい

ることを知った。

本作の主人公ソロモン・ノーサップ（キウエテル・イジョフォー）はアメリカ、ニューヨーク州のサラトガで、妻と幼い娘と息子の4人で幸せに暮らしているバイオリニスト。彼は生まれた時から「自由証明書」で認められた「自由黒人」だから、白人の友人もたくさんいるらしい。そんな生活ぶりは、本作導入部に見る短い「紹介」を見ればよくわかる。ところが、ソロモンはワシントンで開催されるショーでの演奏に来てもらえないかと丁重に招かれ、契約の2週間を終えて興行主と祝杯をあげる中で酔いつぶれてしまうと、その翌朝、大異変が！

『アミスタッド』が歴史の事実にもとづいた物語なら、本作もそう。つまり、本作は1841年のある日突然、財産も名前も奪われて奴隷とされたソロモンが、12年後に再び自由を手に入れた後の1853年に出版した『Twelve Years a Slave』を原作とした「史実にもとづく物語」なのだ。『アミスタッド』もすごかったが、本作もすごい。「本年度アカデミー賞最有力大本命！」のうたい文句に偽りなし。



© 2013 Bass Films, LLC and Monarchy Enterprises S.a.r.l. in the rest of the World. All Rights Reserved.

■不法行為の損害賠償は？刑事告訴は？■

本作のラストには、「11年8か月と26日間」を生き抜き、やっと救出されたソロモンが、彼を苦しめた2番目の奴隷主エドウィン・エップス（マイケル・ファスベンダー）に対して損害賠償の裁判を提起したものの、その請求が棄却されたことが表示される。その理由は、白人を相手にした裁判では黒人が証人として立つことは認められないためらしい。

また、ソロモンを拉致した男であるブラウン（スクート・マクネイリー）とハミルトン（タラン・キラム）たちを刑事告訴したものの、これも結果が実らなかったことが表示される。

それはそれで「なるほど」の世界だが、本作を観ていると、「自由黒人」であったソロモンがさかんにさまざまな「法的権利」を主張しているのが目につく。それは『アミスタッド』でも同じだった。つまり、第6代アメリカ合衆国大統領で、今は弁護士をしている年寄りのジョン・クインシー・アダムス（アンソニー・ホプキンス）から奴隷シンケ（ジャイモン・ハンスウ）の弁護を引き受けた、若くて押しの強い弁護士ボードウィン（マシュー・マコノヒー）の法廷活動を見れば、シンケたちが「非法に拉致された被害者である」ことが証明されれば無罪になるため、その立証に全力を注入していることがよくわかった。

しかして、本作冒頭を観れば、酔いつぶれたソロモンが一夜にして拉致され、奴隷として売り飛ばされてしまうシークエンスが登場するが、「自由黒人」として「自由証明書」を持っているはずのソロモンに対して、なぜそんなことが可能なの？

■□■すごい論文を発見！■□■

そんな疑問をもった私がネットでいろいろ調べていると、すごい論文を発見！それは『順天堂大学医療看護学部 医療看護研究 第10巻1号（2013）』に掲載された、宮津多美子氏の『Twelve Years a Slaveにおける平等主義—自由市民の誘拐と奴隷制の境界線—』。これは、まさに本作の原作を、I. ノーサップの「白人的視点」、II. 誘拐犯罪と地理的境界線、III. 自由黒人の市民権と法的境界線、IV. 人種劣等説と生物学的（知的）境界線、に分けて考察した、8頁にわたる大論文だ。

北朝鮮による日本人の拉致問題は、2004年5月の小泉訪朝によって5人の拉致被害者が日本に戻ってきたが、それ以降の進展もなく、被害者親族の高齢化が憂慮されている。このように、北朝鮮による日本人の拉致問題は今なお現実の大問題だが、南北戦争前に起きたソロモンの拉致事件は過去のもの。しかし、そんなソロモンの「奴隷体験記」ともいえる『Twelve Years a Slave』をここまで丹念に分析し、論文として発表した宮津多美子氏に敬意を表したい。

■□■自由黒人がなぜ奴隷に？この拉致をどう考える？■□■

私には本作導入部にみる、バイオリニストとして白人からも尊敬され、家族4人で裕福な暮らしをしているソロモンの姿も意外だが、それが一夜にして拉致され、奴隷として売買されていく姿も意外。1775年から1783年の「独立戦争」によってイギリスからの独立を勝ちとった当時のアメリカ合衆国の州は合計13州だったが、奴隷制度をめぐる南北の対立は、その後1861年から1865年まで続いた「南北戦争」に発展していくことになる。ネット情報によると、「自由黒人」は全黒人の約1割だったが、そのほとんどが北部にいたのかというとそうでもなく、南北戦争開戦前年の1860年に北部に住んでいたのは46%にすぎず、54%は南部に住んでいたらしい。

他方、前述の宮津多美子氏の論文によると、まず「自由黒人」の定義は、「奴隷制廃止ま

で南部および北部諸州において自由人として（自由人の母親から）生まれた黒人もしくは北部における奴隷制廃止後に法的に自由となった黒人」だ。また、当時、南北では黒人の地理的移動の意味が全く異なっており、奴隷州と自由州を分けるメイソン・ディクソン線（現在は北部と南部の分界線）は多くの黒人にとって実質的には「国境」だった、らしい。また1841年当時の首都ワシントンは奴隷制を採用し、奴隷売買も合法だった。というよりワシントンは国内奴隷貿易の中心地だったらしい。

したがって、ニューヨーク州のコロラドで「自由黒人」として暮らしているソロモンが、いくら「バイオリンの演奏のため」という理由であっても、コロラドからワシントンまで旅行する場合は、拉致され「自由証明書」を取りあげられてしまう危険があったということだ。さらに、当時、税関が「自由黒人」に対して発行していた身分証明書で、奴隷と自由人を区別する公的文書である「フリーペーパー」が州境をこえる黒人には不可欠だったらしい。つまり、フリーペーパーは自由黒人にとって「旅」の安全を保証し、社会的地位を証明してくれる魔法の紙切れだったのである。したがって、これを無くした時点で自由黒人も自由人としての証左を失うことになるわけだ。ああ、恐い恐い・・・。

■同じ農園主でもフォードとエップスの違いをしっかりと■

2人組の男に拉致された挙げ句、奴隷商人のフリーマン（ポール・ジアマッティ）を通じて男女、子供を問わず、多くの黒人が奴隷市場で家畜と同じように売買されている風景は今の感覚では理解しにくい。これが自由の国、民主主義の国といわれていたアメリカ合衆国の当時の一面だ。前作『SHA



MEーシェイムー』（11年）でセックス依存症の男の孤独と葛藤を赤裸々に描いたスティーヴ・マックィーン監督（『シネマルーム28』186頁参照）は、本作ではアメリカ合衆国の奴隷制度の実態を赤裸々に描いていく。

本作中盤のストーリーの軸はソロモンの2番目の農園主エップスの残忍さだ。最初にソロモンを買い取った農園主のフォード（ベネディクト・カンバーバッチ）は、奴隷であっても何かと有能なソロモンの意見を尊重、採用したから、フォードの職場はまずまず・・・？そこでのガンは奴隷に威張りちらし、何かと難クセをつける大工のジョン・ティビッツ（ポ

ール・ダノ) だったが、ある日ティビッツとの間で発生したトラブルによって、ソロモンはお払い箱に。つまり、フォードは「優しいご主人」だったが、単にそれだけで、所詮モノ＝財産にすぎない奴隷はトラブルの解消と借金の返済を兼ねて、エップスに売り飛ばしてしまっただけだ。エップスは広大な綿花畑を所有していたから、牛や馬と同じ存在である奴隷としての黒人は、どれだけの綿を摘むことができるかで優劣が決まることになる。何ゴトにも競争が必要なことは私が常に強調していることだが、本作のように、平均以下だと機械的にムチ打ちの刑を与える彼のやり方は、やはり邪道。ソロモンはさぞつらいことだろう。

本作中盤では、そんなソロモンの苦しみを「共有」し合いながら、同じ農園主でも、フォードとエップスの「違い」をしっかりと！

■□■女奴隷の役割は？ひょっとして男以上に大変？■□■

『風と共に去りぬ』（39年）では、太っちょの黒人女奴隷がスカーレット・オハラ「お嬢さま」に甲斐甲斐しく仕える様子が明るく(?) 描かれていた。また、『ヘルプ ～心がつなぐストーリー』（11年）では、60年代初頭の南部におけるヘルプ＝黒人メイドたちの「クソくらえ!」をキーワードとした、スリリングな展開と問題提起が秀逸だった（『シネマルーム28』42頁参照）。しかし、本作後半の重要なキャラとして登場するエップスの若い女奴隷パッツィー（ルピタ・ニョンゴ）は悲惨だ。

彼女は女ながらソロモンはもとより、屈強な男たち以上の成績をあげていたから、エップスのおめがねにかなない、気に入られたのは当然。しかし、若い女はそれ以外にも使い道があるのが世の常だ。ちなみに、本作ではその「夜の仕事」で気に入られたことによって、自由を与えられた黒人女も登場するから、それと対比しながらパッツィーの苦しみを確認したい。さらに、そんな「男女問題」が発生すると、嫉妬に狂うエップス夫人（サラ・ポールソン）の動静も気がかりだし、そのとぼっちりがパッツィーに集中するのも世の常。最初は嫉妬に狂ったエップス夫人が何かとパッツィーにあたり散らすのを無視していたし、「パッツィーを棄てるくらいならお前を棄てる!」とまで言っていた夫のエップスも、パッツィーの忠誠心に疑いを持ち始めると、パッツィーをトコトンいじめる側に。もともと、気の小さいエップスは自分の可愛い女奴隷を、自分で鞭打ちにするのがイヤだったらしく、その役割をソロモンに回してきたから、ソロモンはとんだ災難だ。

本作前半では、大工のジョンとケンカしたソロモンがジョンによって長時間「首吊り」の処罰を受けるシーンに心が痛くなるが、後半では、ソロモンによるパッツィーの鞭打ちシーンに心が痛くなる。スティーヴ・マックイーン監督の迫力ある撮影技法もあって、この2つの壮絶なリンチシーンは強く印象に残る。男奴隷も大変だが、女奴隷はそれ以上に大変・・・?

■□■こんな奴隷解放論者がホントにいたの？■□■

本作にはブラッド・ピットがプロデューサーとして参加しているが、これはスティーヴ・

マックイーン監督の「長編映画監督デビュー作を観て是非次の作品をプロデュースしたい。」とオファーしたことが実を結んだためだ。そんな「思い入れ」のある本作にブラッド・ピッドは、登場シーンは少ないものの、本作の結末に向けて重要な役割を果たすカナダ人大工で、奴隷解放論者のサミュエル・バス役として出演している。パッツィーからの「あなたの手で殺してくれ！」との頼みを聞き入れることができなかったうえ、イプスの命令によって、そのパッツィーに対する鞭打ちの代行までやられたソロモンは今や最悪。「生きて妻子のもとへ戻る！」それだけを心の支えにして日々のつらい奴隷生活に耐えてきたが、そろそろそれも限界に・・・。

そんな状況下、イプスの屋敷の「離れ」を建てるため、大工としてやってきたのがバスだが、なぜイプスはわざわざカナダから大工を招いたの？あの程度の「離れ」をつくるのなら、フォード家にいた大工のジョン程度で十分だから、わざわざカナダから招かずとも地元の大工で間に合うのでは？しかも、ちょっと話をすればバスが奴隷制度に批判的であることはわかるから、本作のラストに向けてバスが「救世主」のような役割で登場してくるストーリー展開には少し違和感がある。もっとも、本作は「史実にもとづいた物語」だから、それが事実であれば、何も私が文句を言う必要はないが・・・。

■□結末は意外にあっけなく・・・■□

しかして、本作の結末は意外に単純な形で収束していく・・・。ソロモンがバスに依頼したのは、自分の本性を明らかにしたうえで、自分が理不尽にも奴隷としてここに買われていることを、ニューヨークのサラトガに住む「自由証明書」を書いてくれた白人に知らせてもらうこと。実はソロモンは以前にも一度信頼できそうな男にそれを依頼したところ、裏切られてしまったため、そのことに慎重になっていたが、深く話し込むうちに「バスならきっと信用できる」と確信したため、その望みをバスに託したわけだ。しかし、ソロモンの話を聞いたバスの方はあまりにも現実離れした話のため、半信半疑の様子。さて、ホントにバスはソロモンの話をわざわざサラトガまで伝えるのだろうか？

バスがいなくなった後、イプスの呼び出しを受けて「お前の悪巧みはお見通しだ」と「お仕置き」を受けることはなかったから、少なくともバスの「告げ口」はなかったらしい。しかし逆に、ソロモンの奴隷としての日々の生活に変化はなかったから、やっぱりバスはソロモンの依頼など「聞き置いた」だけで一切無視・・・？そんなある日、保安官に導かれてイプスの屋敷の中に馬車に乗って入ってきた白人とは・・・？

このように本作の結末は意外にあっけなくやってくる。したがって、弁護士の私としては、その後に展開されたという民事裁判や刑事裁判についても、本作の「パートⅡ」として「史実にもとづく物語」がつくられることを期待したいが、さて・・・。

2014（平成26）年2月5日記